

今月のポイント

- 立場は手段、共通目標、共通理念でつながる
- 考え続けることを放棄しない
- 失って初めて気が付くつながり



佐々木亮平 (ささき・りょうへい)

岩手医科大学  
衛生学公衆衛生学講座  
●連絡先：〒028-3694  
岩手県紫波郡矢巾町西徳田 2-1-1  
19-651-5111 (内線 5775)



岩室紳也 (いわむろ・しんや)

ヘルスプロモーション推進センター  
(オフィスいわむろ)  
●連絡先：http://iwamuro.jp/

第3回

# つながりを厭わない仲間づくり

## つながろうとする<sup>1)</sup>ことを厭わない仲間づくり

この連載をさせていただいている間も、陸前高田市だけでなく全国でのソーシャル・キャピタル醸成事業は日々続いていきます。陸前高田市が掲げている「ノーマライゼーション」という言葉がいらないうちづくり(以下「ノーマ事業」)<sup>2)</sup>も結局のところ、全ての部局を巻き込んだムーブメント、すなわち陸前高田市のソーシャル・キャピタル醸成事業と捉えて推進しなければ成果

が上がリません。しかし、一方では「余計な仕事を増やして……」という思いを持つてしまう方がいるのも事実です。先日、市役所庁内の全職員を対象とした研修会も、ノーマ事業を通じたソーシャル・キャピタル醸成の機運にどう結び付けられるかを考えていました。すなわち、この連載はわれわれにとつてまさしく自分事であり、自己評価ツールでもあるのです。

ノーマ事業を広げる際にも「障がいや理解しましょう」といった「自分ができる事は何か？」を考えてもらう方向での人財育

成、人づくりは実は非常に難しく、ハードルが高いと実感しています。健康づくりでも「メタボになるとこんなトラブルが想定されます」と言われても、実際に自分自身がトラブルを経験するまで行動変容がでない方が少なくありませんし、知識があつても、仲間がいなければ行動は変わらず、健康づくりが進まないというのは多くの人が経験してきたことです。健康づくりでの経験を生かし、今できていることが、視点を変えればノーマ事業でもあり、ソーシャル・キャピタル醸成事業でもあるというこ

とを意識してもらえよう働き掛けを試みました。

ノーマ事業も視点を変えれば地域づくりであり、健康づくり事業です(表)。すなわち、まずは一人一人がつながり、そして、つながったときお互いの個性を意識することがない仲間づくりを進めることが、結果として一人一人のストレスが少ない、暮らしやすい、住みやすいまちづくりにつながります。これまで「人づくり」「人財育成」という視点を強調していましたが、「仲間づくり」、すなわちつながろうとすることを厭わないことを共有することが重要だと考えるに至りました。

## 立場は手段、共通目標、共通理念でつながる

つながることを厭わないと新たな展開が生まれることを強く実感させられたのが一般社団法人SAVE TAKATA<sup>3)</sup>の皆さんとの出会いです。震災後、農業を通じた復興やICTを活用した連携、若者の育成など幅広く活動を続けられてきた方々です。現在、陸前高田市で進めているノーマライゼーションという言葉のいらないうちづくりアクションプランに明記されている「は

まかだスポットマップ」の作成で協働できないかと働き掛けた結果、地域づくりを通じた復興と一緒に進めてきた仲間としてつながることができました。

彼らは保健医療福祉の分野に関してほとんど情報は持つておられなかったのですが、震災後70回以上開催し続けている陸前高田市保健医療福祉未来図会議から生まれた「はまっつてけらいん、かだつてけらいん

表 ノーマライゼーションという言葉がいらないうちづくりとは

ノーマライゼーションという言葉のいらないうち	ノーマライゼーションという言葉が必要なまち
一人一人が、自分自身の、そして相手の、障がい、年齢、セクシュアリティ、病気、国籍といった個性を意識することのない、誰もが暮らしやすい、住みやすいまち	一人一人が、自分自身の、そして相手の、障がい、年齢、セクシュアリティ、病気、国籍といった個性を意識しながら、意識させられながら、暮らしさざるを得ない、ストレスの多いまち

運動」<sup>4)</sup>通称「はまかだ」<sup>3)4)</sup>、ソーシャル・キャピタルの醸成やノーマ事業といった理念を具現化していく上での「はまかだ」<sup>3)4)</sup>の重要性を理解してくださいました。彼らも自分たちの事業や目標・ゴールである住民一人一人が元気になれるまちづくりを模索し続ける中で、ソーシャル・キャピタルの醸成やノーマ事業といった理念に立ち返り、はまかだ運動という手段、実践が持つ意味を真剣なディスカッションの中から、それぞれ瞬時にご理解いただきました。そういう動きを目の当たりにしたとき、保健師や医師という立場や資格は手段の一つにすぎないと実感させられました。保健師、栄養士、医師、一般職、さまざま地域の中で健康づくり、地域づくりを担う職種はあるわけですが、あくまでそれは一つの立場であり、立場は手段でしかないということです。

## 目的を見据え、考え続けることを放棄しない

現在、健康増進計画の二次やデータヘルス計画など各種計画に携わっている方も多い半面、まったく携わられていない方もあると思います。陸前高田市ではSAVE

TAKATAだけではなく、さまざまな団体と協働する上で、計画があることのありがたみを繰り返し実感しています。すなわち、「陸前高田市はどこを目指しているのですか」と言われたときに、計画を示すことで「まちづくりからのアプローチ」も大歓迎ですと提示できるようになっています(図)。

自分の組織、自分の担当のところだけで解決し、仕事が進むのであればこんなに簡単なことはありません。一方で、自分が担当していることに問題があると思っても、それを誰かに説明したり、前述した未来回会議という場に投げかけたりすることは、結果として「自分の無力さが明らかに」ことと捉えてしまうと、結果としてつながることを厭う気持ちが生まれてしまいます。

つながり続けることにはエネルギーが要ります。情報がなかった震災直後は否応なしに人はつながろうとしていましたが、震災から時間がたてばたつほど、つながらなく

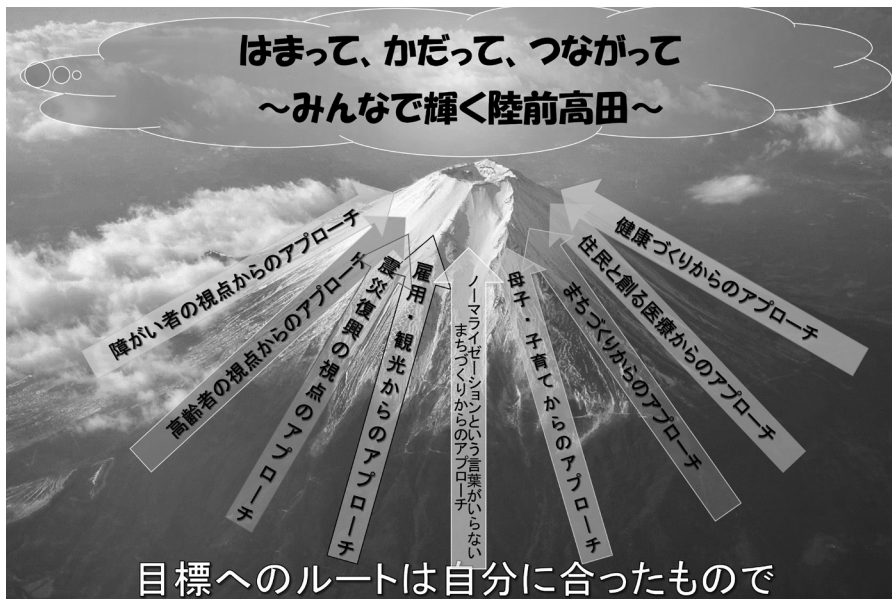
うものがあります。それはいい意味で落ち着いてきたという、安心感につながるものもあると思いますが、半面、被災によりさまざまな動いていたものが、時間とともに動かなくなり、動かなくてもよくなり、動きたくなくなっているのではないのか、という指摘だと受け止めています。

人は経験に学ぶと言いつつ、愚者は経験に学ばず、賢者は歴史にも学ぶ。震災前の歴史と震災後の経験を、被災地、非被災地に関わらず大事にしていきたいと思いま

### 失って初めて気がつく つながり

昨秋、陸前高田災害FMの一つの番組が約1年半ぶりに復活しました。震災1年後から「元気の達人講座」として60回以上、3年にわたって陸前高田のいま、そしてこれからを健康づくり、元気づくりの視点から発信し続けていた番組でした。不思議なもので、この番組を放送し続けていたときも市民の皆さんからお声掛けいただいたのですが、「あの番組が一度中断してからの方が、」

図 陸前高田市健康づくり推進計画が目指すこと(富士登山に例えて)



とも、考え続けなくともそれなりに毎日過ごせるようになってしまっています。ですが、何より苦しい、考えること、考え続けることを放棄せず、他者、他機関、地域、他文化とつながり続けることで生まれ

かけていただくことが多くなっていました。気が付けば、番組が市民の皆さんの日常の中に溶け込み、当たり前のようにあったことがうれしく思いました。と同時に失って初めて気がつく、つながりの場、仲間づくりの場、ソーシャル・キャピタル醸成事業だったようでした。ラジオという耳から入る媒体により、パーソナリティとリスナーが、もしくはリスナー同士がいまという時間を共有し、共感したり疑問に思ったり、何らかの形で支え、支えられている、そういう時間(居場所)であったのだと教えていただきました。

佐々木・岩室に限らず、多くの人がそれぞれの震災で大切な人を、つながりを、時間を失い、失って初めて気がつくつながりもあつたと思います。これは何も震災に限ったことではありません。佐々木は昨秋、学生時代から同級生の保健師を失い、このときもただ彼女に支えられていたのか、つながりがあつたのか、教えられていたのか、失った後で気付かされました。失うにはさまざまな形がありますが、仲間を失うことほど悲しいことはありません。これからもどうか、多くの皆さんとつながり続け、仲間づくりをお互いにし、苦しい

る「新しい気付き」を力に変えていくしかないようです。

### 愚者は経験に学び、 賢者は歴史に学ぶ

考古学の言葉に「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というものがあります。そう考えるならば、人は経験にしか学べないと言いつつ続けてきたわれわれは愚者なのか…と考えさせられました。しかし、現代社会のように多様な思いを持った住民を巻き込んで地域づくりを仕掛けた歴史はなく、ソーシャル・キャピタルが醸成されたところでは人は健康になるというエビデンスを信じて前に進むしかありません。

震災からの時間がたつにつれ、震災前よりもよい形に、よりよいまちにという思いが萎み、震災前と同じ、震災前に戻ろうという思いに引つ張られてしまっている自分たちがいます。考えることから放棄し始めると簡単にそういう思考回路に陥ってしまいかねません。「できていたことはできる、できていなかったことはすぐにはできない」に立ち返る必要性を実感させられています。被災地に通い続けている人たちの声の一つに、「被災地の足が止まった」とい

けれどもつながり続けることがその人なり、それぞれの幸せのカギになると信じて進んでいきたいと思えます。

こうした寄稿を続けさせていただくことも正直、多くの痛みを感じ、簡単なことではありませんが、それ以上に、全国の読者の皆様とつながり続けることができるという希望、喜びがあります。新年を迎え、東日本大震災から6年となります。あらためて痛みを希望に変えていくことのできる1年としたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いたします。

### 文 献

- 1) 佐々木亮平, 岩室紳也. 隔月連載 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは 復興を機会にノーマライゼーションの加速を 第3回. 「月刊地域保健」. 2014, vol.45, no.8, p.40-45.
- 2) SAVE TAKATA <http://savetakata.org/>
- 3) 佐々木亮平, 岩室紳也. 災害を支える公衆衛生ネットワーク 東日本大震災からの復旧、復興に学ぶ・9. このころのケアとは ポピュレーションアプローチの視点から. 月刊「公衆衛生」. 2012, vol.76, no.12, p.61-66.
- 4) 佐々木亮平, 岩室紳也. 隔月連載 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは 東日本大震災から5年昨日に感謝を、今日に情熱を、明日に希望を 第12回【最終回】. 「月刊地域保健」. 2016, vol.47, no.2, p.46-51.
- 5) 災害時の公衆衛生 陸前高田市のいま <http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>